ハーバート・ノーマンについて

—— オタワで思うこと ——

大窪愿二

ハーバート・ノーマン▶

占領中の一九四六年から五〇年までカナダ代表部の初代首席として日本の各界とも接触、交際を保った外交官ハーバート・ノーマンについて、忘れがたい思い出をもつ人はまだ決して少くないと思う。この人はその後、駐ニュージーランド高等弁務官（大使）をへて駐エジプト大使となり、国連緊急軍の受け入れによるスエズ紛争の解決などに大きな功績を残しながら、一九五七年四月四日カイロで自ら命を絶った。それからもう二十年になろうとする。ノーマンはすぐれた外交官であったばかりでなく、学者であり、殊に歴史家として日本近代史の研究にも大きく貢献した稀有の人材であり、その残した著作の類ばかりでなく、日本の知識人との交際、対話のなかにまで、西欧文化の広く深い教養と高貴なヒューマニズムがひかっていた。すぐれた知識人でありながら、学殖を誇る風は少しもなく、実に思いやりの深い、人間的な人がらであった。

私はまた戦前からの顔見知りであったという偶然から、戦後の時期にノーマンの協力者となり、その著作の訳者となる名誉を与えられた者として、痛惜の念なしには、この人について何ごとも語ることはできない。今こうして、カナダの首都オタワに来ているのも、もとは私なりに何とかこの人の生涯の足跡をたどってみることで、生ける日のイメージを再構築してみたい思いから始っている。具体的にいえば、ノーマン著作集の附録として、伝記的エッセイを考えているのであるが、できる限り文献をあさり、さらに彼を記憶する多くの人に会わねばならないだろう。また最近ノーマンへの関心を強めている比較的若い人びととも意見を交えてみたいと思っている。

さて、ノーマンの著作は、日本語に訳され刊行されたとき、なぜあれほど肯定的に受けいれられ、評価されたのであろう。今からふりかえっても、「日本における近代国家の成立」が一九四七年に刊行されたときの反響は大きかった。高名な学者たちがこぞって書評にとりあげ、新聞は全国的に紹介した。いくつかの大学では教科書に指定されもした。前後して出た「兵士と農民」も、陸井氏の訳によって前著に劣らず高い評価を得た。著者の表現力と構成力、ことに端正で迫力ある文体は、歴史観を異にする北米の学者たちも認めているが、訳文がそれを十分に再現したとはいえないまでも、やはり魅力の一つであったに違いない。少くとも、極めて新鮮な印象をあたえたことは否定できない。

ところが、これとは別に、北米の日本近代史研究者として後につづいた多くの学者のなかには、ノーマンはマルクス主義の影響のもとに、日本のマルクス主義歴史学の著作から多くのものをとり入れたから、日本で高い評価を得、広く読まれたのだという論者がある。この点について、私はとりあえず次の点を指摘しておきたい。(一)マルクス主義というものの定義についてこれら論者の理解の仕方には問題がある。(二)ノーマンは、マルクス主義でない他の多くのアカデミー史学の成果も広く吸収している。(三)明治維新と近代日本について合理的な社会経済的説明を加えたのは、三〇年代に日本のマルクス主義歴史家が初めてなしえたことである。(四)ノーマンの北米における後継者たちは、これらの実証的成果を吸収することを努めてさける傾向をもっている。(五)日本の歴史学は、四五―四七年までは三〇年代の成果の上に適切な明治維新史の総論を生み出していなかったから、外国の非マルクス主義の学者が広く国際的視点も含めた展望のもとに維新史の過程を見事に叙述したのを知って驚き、また一般の読書界は日本の置かれている歴史的地位の認識を新たに教えられ、そこから日本の民主的将来への励ましを受けたのであった。

この最後の点は「忘れられた思想家―安藤昌益のこと」について特に言えるであろう。五六年に日本語でだけ刊行された「歴史随想集―クリオの顔」に収められた諸篇は、何よりもよくノーマンと歴史の関係を語るものであり、その思想を知る上で最適のものであろう。そこに見られる歴史家ノーマンの顔は、初期の諸著に見られるそれとはいささか異なっている。戦後史の発展のなりゆきを見つめる目つきは、さすがに寂しげであり、心を打つものがあった。

今度、十一年ぶりにカナダ外務省の好意でこの地にやって来た私は、カナダでのノーマンをどのように見出すのであろうか。オタワは全市が公園のような、美しく整った中級の都市であり、近年の発展ぶりは目ざましい。そのあくまで青くひろがる空のもとで、ノーマンの見えない像は、かつて自ら新井白石を評した言葉のように、「やや寂しげに」独り立っているのだろうか。他の知的中心ではどうであろう。

↙いる。関西学院大学と青山学院大学は、元来アメリカ系メソヂストが創設したものであるが、カナダ・メソヂスト教会は一九一〇（明治四三）年から関西学院の経営に参加している。そのころから関西学院は飛躍的発展をとげるようになり、今では関西で同志社と並び称されるキリスト教系名門校となっている。

以上概観してきたように、カナダ・メソヂスト・ミッションは、その日本宣教を通じて、近代市民精神の高揚と近代教育の発展に寄与すること甚大であったのみならず、多くの優れた思想家をも輩出した。さらに、その宣教自体は、日本のプロテスタント運動の鼎をささえる一つの支柱ともなっていた。カナダが独自の外国伝道を開始するにあたって、一番最初に日本を選んだことも、また、意義深い。現在日加関係がますます重要視されつつある時期にあたって、こうした日加文化交渉史の開幕を回顧してみるのも、また一興ではなかろうか。

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

東京都港区赤坂七丁目三番三八号
カナダ大使館広報部